

## 「近代世界システム」と商人のネットワーク ——近世ヨーロッパの特徴——

玉 木 俊 明

### はじめに

現在の高校世界史の教科書では、近世のヨーロッパにおいて「主権国家」が誕生したとされる。主権国家とは、文字通り、国家そのものが「主権を有する」点に大きな特徴がある。1648年のヴェストファーレン条約で神聖ローマ帝国は事実上機能しなくなり、ヨーロッパから「世界帝国」が消え失せ、そして、主権国家が誕生した<sup>1)</sup>。

さらに近代になると、一つの国民が一つの国家を形成するという「国民国家」が生まれる。しかしそれも、国家が主権を有するという意味での「主権国家」であった。もとより、一つの民族が一つの国家を形成する「国民国家」というのは、現在の眼からはフィクションというよりほかない。しかしそのフィクションが、やがて世界の歴史を大きく動かしていった事実も、われわれは認めなければならぬ。こんにちもなお、国家とは「国民国家」であるべきだという考え方が根強く残っているからである。しかし、それは「想像の共同体」という神話にすぎない<sup>2)</sup>。

ところでフィクションとしての国民国家に対峙されるものは、実態としての「世界システム」であろう。近代ヨーロッパには、かつてのローマ帝国のような「世界帝国」はなく、政治的単位として重要なものは、比較的小規模な主権国家、のちには国民国家しかなかった。「近代世界システム」の提唱者ウォーラステインの考えでは、「世界帝国」を支えるための大規模な官僚制などは不要であり、余剰が「世界システム」の発展に使われることになった。

ウォーラステインによれば、「近代世界システム」は、16世紀中頃のヨーロッパで生まれ、それはやがて世界を覆い尽くすまでに成長する。「近代世界システム」の中核には、強力な経済力をもつ国が位置する。17世紀中頃のオランダ、19世紀後半から第一次世界大戦までのイギリス、1950年代から60年代にかけてのアメリカ合衆国がそれにあたる。ここで、ウォーラステインのいう「近代世界システム」に関する適切な説明を引用してみよう。

著者〔ウォーラステイン——玉木〕のいう「世界システム」とは、単一の分業によって覆われ

1) ここでいう「世界帝国」とは、一つの大きな政治的統一体を意味する。

2) ベネディクト・アンダーソン著（白石隆・白石さやか訳）『定本想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山、2007年。

る広大な領域で、その内部に複数の文化体を包摂するものである。歴史上「世界システム」は二つの形態をとって現れる。すなわち、「世界帝国」と「世界システム」とである。前者は、単一の分業体制のもとにあるばかりか、政治的にも統合されているものをさし、後者は政治的統合を欠く分業体制を意味する<sup>3)</sup>。

ウォーラステインの発想では、近世のヨーロッパ社会においては、このような分業関係が成立した。その構成要素として、国家もあった。すなわち、ある国が工業国となり、原材料の輸入国を搾取・収奪するというシステムが成立していたと考える。

本稿は、このようなウォーラステインの理論を出発点とする。しかしそれをより歴史的現実をとらえやすい分析道具に変え、「近世ヨーロッパとはなにか」という問題に対する、一つの回答を提示する。ウォーラステインのように、近代世界を一つの分業体制ととらえてしまうだけでは、分業体制を成立させていたネットワークがみえなくなってしまう点に大きな問題がある。本稿では、このネットワークこそ、近代世界システムを成立させていた鍵だと主張したい。

## 1. 世界システムと主権国家

「世界システム」という単位は、近世においてはヨーロッパの多くの地域経済を包摂した巨大な経済的単位であった。世界システムが機能したからこそ、主権国家は成立しえた。経済的にみるなら、主権国家は世界システムのサブシステムとして機能した。主権国家と、近代世界システムは併存したのである。より正確な表現を用いるなら、世界システムが機能したからこそ、主権国家が成立できたのである。

このように考えてみると、現在の日本の主権国家に関する研究では、主権国家が存在しえた理由をうまく説明できてはいないように思われよう。各国史の研究者が、自分が研究対象としている国の国家主権が確立して行く過程はよくわかっても、ヨーロッパ全体でどのようなシステムが働いてそれを可能にしたのかはわからない。これは、こんにちの日本における主権国家研究の大きな弱点であろう。

世界システム論の考え方に従うなら、ヨーロッパから世界帝国が消滅し、世界経済が誕生したために各国は政治的・経済的な競争を余儀なくされ、その過程で生まれたのが、主権国家であった。

世界帝国とは、中央が政治的な支配をし、武力を独占することになるので、基本的には内部で競争がおこらない。それに対して西欧では、主権国家が並び立ち、競争することになった。重商主義時代がそれにあたる。その経済力を用いて、最終的には軍事的な競争をする。そのため西欧では、

3) 川北稔「まえがき」I・ウォーラステイン著・川北稔訳『近代世界システム I —— 農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』岩波現代選書、1981年、ix頁。

武器をはじめとする戦争技術がどんどん発展していった。武器をもったヨーロッパ人は、やがてアジアに進出する<sup>4)</sup>。

このように、世界システム論は実に巧みに主権国家の誕生を説明する。しかしまたここから想起されるように、世界システム論とはあくまで「国家」史の枠組みの上に構築された理論であることは看過できない。

ヨーロッパ世界経済のなかで、さまざまな国が経済的・政治的に競争したことは、疑うべくもない。しかしそれを可能にしたネットワークに目を向けないとすれば、主権国家を成立させたメカニズムの分析にはならない。またこれまで、そのような試みがなされたとも思われぬ。そこで次節では、それについて言及したい。

## 2. 世界システムを可能にした商業メカニズム

すでにのべたように、ウォーラステインの定義によれば、「ヘゲモニー国家」とは、工業、商業、金融業の三部門で他を圧倒するような経済力をもつ国家を意味する。さらにこの三部門は、工業、商業、金融業の順に勃興し、衰退する。実はウォーラステインのこのような主張こそ、彼の議論が国家史の枠組みを出ていないという証拠になろう。

ウォーラステインの主張通り、近世ヨーロッパには、世界帝国はなかった。カール5世とその子フェリペ2世、あるいはナポレオン1世がその構築をこころみたかもしれないが、失敗に帰す。主権国家が経済競争することで、経済が大きく成長した。たしかにこの「経済競争」とは重商主義戦争、さらには植民地獲得戦争も意味した。近世のヨーロッパ史において、戦争と経済発展は両立した。

もとより、この時代の戦争に、こんにちの戦争の概念をあてはめてはならない。規模ははるかに小さく、使用される武器の殺傷能力は、現在と比較すると非常に小さかったからである。

しかし、経済的負担は大きかった。多くの政府は、巨額の借金をしながら戦争を遂行した。そのため、国家財政が急速に近代化した<sup>5)</sup>。近世ヨーロッパの国家は、ほぼすべてが借金財政に苦しんだ。しかもその財政負担は、世界帝国を維持するための費用よりも少なかったという証拠は、実はどこにもないのである。それどころか、世界帝国が維持すべき負担を、主権国家に転嫁したにすぎないのかもしれない。

主権国家とは、このような状況で誕生した国家を指すのであり、国家財政の研究なくして、主権国家の研究はありえないといえよう。財政 = 軍事国家 Fiscal-Military State という言葉が人口に膾炙

4) 川北稔『イギリス近代史講義』講談社現代新書、2010年、130-131頁。

5) この点に関する研究は欧米では枚挙にいとまがないが、邦文での代表的な文献として、パトリック・オブライエン著（秋田茂・玉木俊明訳）『帝国主義と工業化 1415～1974——イギリスとヨーロッパからの視点』ミネルヴァ書房、2000年。

するようになったにもかかわらず、日本では、いっこうにこの面からのアプローチが進展せず、近代ヨーロッパの国家形成に関する重要なテーマが取り上げられていないのは、大きな欠落というべきであろう。

税金という面からみるなら、国家の領域とは、政府によって税金がかけられる範囲を意味する。中世から近世になるにつれ、それが明確になる。一つの領地の支配者は一人ないし一つの機関になる。この点から考えると、近世ヨーロッパの国家こそ、こんにちの国家のモデルとなったのである。しかしその一方で、資本の移動はより国際化した。その移動の担い手となったのは、国際貿易に従事する商人であった。

国境が明確になっていくのとは逆に、商人のネットワークは国際化した。この重要性は、いくら強調しても、しすぎることはあるまい。商人のネットワークがそもそも国際的であったというだけでなく、戦争に必要な費用は、自国内にとどまらず、商人のネットワークを通じて、他国からも借りる必要があったからである。国家間での経済競争とは、コスモポリタンな商人ネットワークを利用し、有利な条件で戦争に必要な資金を調達するということでもあった。主権国家ないし国民国家が機能するには他国からの借金が必要であり、そのためには、商人のネットワークの形成が不可欠だったのである。また、そうしなければ植民地は獲得できなかった。国家が人間の臓器であるとすれば、商人ネットワークは血液であった。血液の循環があってこそ、臓器は機能するということを忘れてはならない。

ウォーラーステインの「近代世界システム」に欠けているのは、このような視点である。ウォーラーステインの理論には、国家や地域を結ぶ媒介がない。また、国家や地域間の関係に、商人の広域ネットワークが入り込む余地がない。ヨーロッパで近代世界システムが機能したとすれば、国際貿易商人のネットワークの存在を軽視することは不可能である。近代世界システムとは、コスモポリタンな商人の活動を前提条件としていた。本稿では、世界システム論にこの視点を導入する。

ところで中世後期と近世において長距離貿易に従事する商人は、どこかの都市を拠点としていた。彼らを形容するとすれば、たとえばロンドン商人ではありえても、イギリス商人ではありえない。ましてや、ヴェネツィア商人を、イタリア商人ということは不可能であろう。

このような商人が宗教的迫害や戦争により、移住を余儀なくされた現象は「ディアスポラ」とばれる。この用語は、現在では日本の歴史学界に根づいたとあって差し支えあるまい<sup>6)</sup>。国家史の観点からは、彼らは住むべき土地を奪われ、異邦への移住を余儀なくされ、虐げられた人々である。しかしそのようないわばネガティブな見方は、同一宗派のネットワークを強調する研究により、完全に変わった。国境を越えた宗教的ネットワークを強調する見方が、こんにちではむしろ主流になっているように思われる。

6) 深沢克己「ヨーロッパ商業空間とディアスポラ」『岩波講座世界歴史 15 - 商人と市場 - ネットワークの中の国家』岩波書店、1999年、181-207頁。深沢克己『商人と更紗——近世フランス・レヴァント貿易史研究——』東京大学出版会、2007年。

しかしながら、同一宗派のネットワークが発達してヨーロッパのさまざまな地域に及び、彼らが広域の取引をおこなったとしても、同一宗派間でのみ商業活動をするとするなら、逆説的に思われるかもしれないが、ヨーロッパ経済は発展しない。彼らの商業行為は、取引先が大きくかぎられているうえ、より有利な別の宗派との取引をおこなわないため、ヨーロッパ全体の取引量が減少するからである。ヨーロッパの経済成長に注目せず、一次史料を丹念に分析し商人ネットワークの拡大に注目する研究は、このような問題点があることをここで指摘しておきたい。歴史現象のある部分を興味深く説明できる歴史理論が、歴史全体の流れを整合的に説明できるとはかぎらない。

現実には、商人は、宗派を越えた取引に従事した。たとえ宗派は異なっても、評判の良い商人と取引したいと思う人々はいた。それは、異文化交易 Cross Cultural Trade と呼ばれ、現在のヨーロッパにおける商業史研究の焦点ともいえるのである<sup>7)</sup>。ヨーロッパ経済が全体として発展したのは、商人が各地に移住し、彼らがさまざまな土地に住む同一宗派の人々と取引したばかりか、他宗派に属する商人とも取引をした。だからこそ、ヨーロッパ全体で取引量が拡大したのであり、経済成長につながったのである。

このように、本稿では商業ネットワークの拡大を近代世界システムの主要な特徴としてとらえる。そして近代世界システムの誕生にとってもっとも重要な都市は、16世紀のアントウェルペンであった。

### 3. アントウェルペンの役割

ここではアントウェルペンの経済的興隆を、主として中澤勝三著『アントウェルペン国際商業の世界』<sup>8)</sup>に依拠しながらみていこう。

中世のイングランドは羊毛の輸出国として知られていたが、15世紀初頭から中葉にかけ、未完成の毛織物の輸出国に変わる。イングランドの経済的地位は、ここで一段と上昇した。イングランドの毛織物は、ほとんどがアントウェルペンに輸出された。アントウェルペンの台頭は、イングランド産の毛織物輸出と切っても切り離せない関係にあった。中世の北方ヨーロッパの中心となる市場はブリュッヘであったが<sup>9)</sup>、その跡を継いだのが、アントウェルペンである。

ブリュッヘは、フランドル製の毛織物を輸出する市場であった。それゆえ、アントウェルペンがイングランドと結びつくことは、ヨーロッパで新しい経済構造が誕生したことを意味した。アントウェルペンで活躍したのは、ケルン商人であった。そのため南ドイツ商人が、チロルやハンガリー

7) 代表例として、フィリップ・D・カーティン著（田村愛理・山影進・中堂幸政訳）『異文化交易の世界史』NTT出版、2002年。Francesca Trivellato, *The Familiarity of Strangers: The Sephardic Diaspora, Livorno and Cross-Cultural Trade in Early Modern Period*, New Heaven and London, 2009.

8) 中澤勝三『アントウェルペン国際商業の世界』同文館、1993年。

9) James M. Murray, *Bruges, Cradle of Capitalism 1280-1390*, Cambridge, 2005.

の鉱産物を販売するとき、アントウェルペンを選んだのである。ここに、アントウェルペン台頭の一つの鍵があった<sup>10)</sup>。

大航海時代がはじまる一五世紀末になると、アントウェルペンには、ポルトガルからアフリカ産の植民地物産が輸入されるようになる。さらにポルトガル商人は、南ドイツやハンガリーの銅をここで購入した<sup>11)</sup>。

イングランド産の毛織物、南ドイツ産の銀・銅、さらにポルトガルの香料が、アントウェルペンを国際都市にする原動力として機能したのである<sup>12)</sup>。

アントウェルペンの金融市場は、すでに南ドイツからの銀でかなり潤っていた。しかもスペイン領アメリカから銀を輸入することで、利益はさらに拡大した。ポルトガル王、イングランド王、コジモ・ディ・メディチでさえ、アントウェルペンの短期信用の顧客となった。アントウェルペンは、おそらくフランス最大の金融市場であるリヨンさえ抜き、ヨーロッパ最大の金融市場へと成長したのである。

すでに16世紀第2四半期の段階で、アントウェルペンはヨーロッパで有数の金融都市として活躍するようになった。ロンドンの通貨操作は、おそらくアントウェルペンから輸出されたものであろう。イギリス史家ブランチャードは、これは「金融のディアスポラ」と呼んだ<sup>13)</sup>。

アントウェルペンはまた、16世紀中葉に、他都市に先駆けて取引所 (bourse) をつくり、さらに取引所における商品の価格を記した「価格表」を作成した。アントウェルペンとほぼ同時期に、アムステルダムとハンブルクでも取引所がつくられた。これは、おそらくアントウェルペン商人の影響であろう。アントウェルペンに来たアムステルダム・ハンブルク商人、ないしアントウェルペン商人がアムステルダム・ハンブルクに赴くことで、両都市の取引所ができたと推測できよう。

低地地方や北ドイツの経済発展は、ブリュレがいう、16世紀後半の「アントウェルペン商人のディアスポラ」<sup>14)</sup>が寄与したのである。

1600年頃には南ネーデルラントからハンブルクへと移住する商人が増え、その中核をなしたのがアントウェルペン商人であったことは間違いない。アントウェルペンには、イベリア系ユダヤ人のセファルディムも移住してきた。またアントウェルペンと、「ジェノヴァ人の世紀」(1557-1627)を迎えたジェノヴァとの商業関係も密接であった。

また、マーチャント・アドヴェンチャラーズのステーブルが1567年にアントウェルペンからハンブルクに移動したときも、アントウェルペンの有名な商家が、ハンブルクにまで移動していた。また、

10) 中澤『アントウェルペン国際商業の世界』。

11) 中澤『アントウェルペン国際商業の世界』80頁。

12) 中澤『アントウェルペン国際商業の世界』1-2章。

13) Ian Blanchard, *The International Economy in the "Age of the Discoveries", 1470-1570: Antwerp and the English Merchants' World*, Stuttgart, 2009.

14) W.Brulze, "De Diaspora der Antwerpse kooplui op het einde van de 16e eeuw", *Bijdragen voor de Geschiedenis der Nederlanden*, Vol. 15, 1960, pp.279-306.

ハンブルク商人も、アントウェルペンまで出かけて商業に従事していた。したがって、マーチャント・アドヴェンチャラーズのステーブルが、商人のネットワークに変化をおよぼしたとは思われない。むしろ、北西ヨーロッパ商人のネットワークの拡大とみなすべきであろう。これも、「アントウェルペン商人のディアスポラ」の一部とみなすことができる。

#### 4. アントウェルペンとアムステルダム<sup>15)</sup>

アントウェルペン商人の移住先として、もっとも重要だったのは、むしろアムステルダムであった。16世紀後半から17世紀前半にかけ、同市は非常に急速に巨大化した。それはさまざまな地域から、人々が移住したからにはほかならない。なかでも、アントウェルペンからの移民は多かった。ここではまず、この分野で画期的な業績をあげた、ヘルデルブロムの研究をとりあげる。彼は、1578—1630年のアムステルダム商人の研究をし、5,000人の卸売り商人の氏名を収集し、このうち、850人が南ネーデルラント出身の商人であることを確認した。ただし気をつけておかなければならないが、通常この種の統計は、アムステルダムに移住する前に居住していた場所しかわからないので、現実には、アントウェルペンからいくつかの場所をへてアムステルダムに移住した人々の数は、これよりずっと多かったと考えられることである。

ともあれ、ヘルデルブロムは、これらの商人の移住・職業・経済活動・社会的地位・富・宗派を分析した。グループごとの分析をしても、新しくアムステルダムに到来した商人と従来からいる商人の間での事業戦略の相違や相互関係は発見できなかった。さらに、卸売企業の日常の経営についてもわからなかった。

しかし明らかになったことがいくつかある。一番重要なことは、アントウェルペンからアムステルダムへの移住は、アントウェルペンが陥落する1585年以前の1540年代からすでにはじまっていたことである。1580年代末までに、200人以上の商人が、アントウェルペンからアムステルダムに移り住み、事業を続けた。1609年には、南ネーデルラントから450人の企業家がアムステルダムに移住し、卸売業に従事した。

しかし、移民はアムステルダム商人のうち三分の一しか占めていなかった。1610年以降、アントウェルペンから第二世代が移住したが、その数は350名程度であった。きわめて注目すべきことに、移住した人々のほとんどは裕福ではなく、アムステルダムに来てから国際貿易に従事するようになったのである。17世紀にいたるまで、南北ネーデルラント出身の商人は、家族との協同作業を重んじた。

彼の主張によれば、16世紀後半のアムステルダム台頭後も、アントウェルペンは重要な貿易港・金融拠点として機能した。ネーデルラントの南部諸州からの商人は、アムステルダムの穀物輸入に資金を提供した。アントウェルペンでは富裕でなかった多数の商人は、アムステルダムに移住して

15) 本節は、玉木俊明『北方ヨーロッパの商業と経済——1550- 1815年』知泉書館、33-36頁に依拠している。

から富裕になったのである。この点から考えると、ヘルデムブロムは、アントウェルペン商人が長期的にアムステルダムに移住したことを研究しながら、現実にはアントウェルペン商人のアムステルダム商業への貢献度を低く見積もっているといえる。

ヘルデルブロムの研究の問題点がとして、ヘルデルブロムは南ネーデルラントの役割を過小評価しているというクレ・レスハーの指摘がある。ヘルデルブロムは「貧民」の所得基準を高くしすぎているため、貧民数が多くなっているのだという。たしかに、より商業が発達していたアントウェルペンからアムステルダムに移住した人々が、アムステルダムの商業発展に貢献したと考える方が妥当であろう。

ところで、これまでオランダ史では、近世のアントウェルペンとアムステルダムの相違点が強調される傾向があった。

アントウェルペンは、同市の在住者ではない人々が盛んに貿易をした——受動貿易——の都市であった。それに対し、アムステルダム人は積極的に貿易に参加し、能動貿易がおこなわれていた。また、「アムステルダムは独自の商船隊で、一方アントウェルペンは、とりわけ外国商人の船舶のおかげで発展したのである」ともいわれる。アントウェルペンで活発に活動していたのは、アントウェルペン在住の商人ではなかったのに対し、アムステルダムの場合、同市在住の商人が取引したと考えられてきたのである。

このような主張に対し、むしろ両市の類似性に注目する研究が出現はじめている。

アムステルダムは後背地とそれ以外の地域を結ぶ役割を果たしたことも明らかになっており、圧倒的に海運業指向だったわけではない。また現実には、アムステルダムで取引する多くの人々が、アムステルダム出身の商人ではなかった。すなわち、アントウェルペンと同様、アムステルダム受動貿易の都市だと考えられるのである。では、近世アムステルダム商業の特徴はどこにあったのか。

アムステルダムの人口は急激に増え、移民が大量に流入した。16世紀末からの50年間ほどので、アムステルダムの人口は5万人から20万人にまで増大する。アムステルダムに居住する人々のなかで、同市出身のもの比率は17世紀には30%台であり、それ以降も50%台と、かなり少ない。オランダ国内だけではなく、外国からの移民もいた。またアムステルダムから、特に北方ヨーロッパに移住した人々が多かったことはよく知られる。それは、この都市に多数の移入民がいたから可能になった。つまり、アムステルダムに移住した人々のうち、少なからぬ人々がまた別の地に移住したのである。

アムステルダムは、人口流動性がきわめて高い都市であった。16世紀後半においては、アムステルダム生まれの商人は少なく、取引の多くは、アムステルダム外出身の手によってなされた。南ネーデルラントやドイツを中心とするとはいえ、さまざまな地域出身の商人が同市での取引に従事した。また彼らの中には、アムステルダムで商業を営んだのち、他地域に移動したものもいた。リエージュ出身で、アムステルダムに移動し、たった3年間だけ同市に滞在し、さらにストックホルムに渡ったルイ・ド・イエールは、その代表例である。



商人がアムステルダムに一時的ないし数世代滞在し、その後別の地域に移動したことも多かった。この都市を通して数多くの商業上の情報・ノウハウが流れたと考えられる。近世アムステルダム最大の機能の一つは、まさにこの点にあった。

アントウェルペンとアムステルダムの最大の差異は、基本的に後者の商業規模が圧倒的に大きかった点にある。オランダ東インド会社のヨーロッパの根拠地はアムステルダムにあったことから判明するように、アムステルダムは世界に開かれた商業都市であった。アントウェルペンの商業規模は、それと比較するとはるかに小さかった。しかしまた、アントウェルペンなしでは、アムステルダムの発展もなかったはずである。

## 5. ロンドンとアントウェルペン——フィッシャーの視点

次に取り上げるのは、ロンドンとアントウェルペンの商業関係である。その出発点となるのは、イギリス人フレデリック・ジャック・フィッシャーの諸論考である。フィッシャーが亡くなったのは1988年であり、20年以上前のことであるが、彼の論はいまだに乗り越えたとはいえ重みがある。フィッシャーが重視したことのなかに、ロンドンの役割がある。フィッシャーは、ロンドンからアントウェルペンへの毛織物輸出を中心に研究を進めた<sup>16)</sup>。

毛織物の輸出に関しては、ロンドンはイングランド全体の8—9割を占めた。そのロンドンがアントウェルペンに輸出した未完成の毛織物はそこで完成品となり、ドイツやイタリア、レヴァントに送られた<sup>17)</sup>。完成品ではなく半完成品の輸出をすること自体、イングランドが低開発国であったことを物語る。イギリス経済史家ラムゼイの言葉を借りれば、ロンドンはアントウェルペンの「衛星都市」<sup>18)</sup>であった。そのロンドンがやがて他国の都市を「衛星都市」にしていく過程こそ、イングランド経済の台頭を意味しよう。

とはいえ、18—19世紀と異なり、16—17世紀のイングランド経済史では、統計史料はあまり使えない。しかしフィッシャーによれば、人口が5—6万人から50万人に成長したロンドンの影響力がきわめて重要であった。この成長には、外国貿易、製造業、金融業と専門職事業のための食糧供給、さらにロンドンが政治的・文化的中心だったことから生じた。さらに、それまで後進地帯であった西部と北部が経済的に発展し、とくに製造業が栄えたことを見逃してはならない。これらは国の反対側でおこったので、内陸交易が盛んになった。このような発想は、都市化＝近代化とだけとらえ

16) フィッシャー自身は書物を著していないが、死後、おもな論文が一冊の本にまとめられた。P. J. Corfield and N. B. Harte (eds.), *London and the English Economy 1500-1700*, London and Ronceverte, 1990. 本節の議論は、この本にもとづく。

17) R. Davis, *English Overseas Trade 1500-1700*, London, 1973, p.50.

18) G. D. Ramsey, *The City of London in International Politics at the Accession of Elizabeth Tudor*, Manchester, 1975, Chapter II.

がちな近年の研究スタイルとは、一線を画す。

フィッシャーは、ロンドンの発展を、なによりも外国貿易の伸張と結びつけた。

16世紀のイングランド最大の輸出品が、ロンドンから輸出される毛織物であったことはすでに述べた。表1にあるように、世紀前半は輸出増の時代であったが、後半になると、輸出量は増えない。

表1 ロンドンからの標準毛織物輸出力 単位:クロス

3年間の平均 1550-3年は単年。

1500-2年	49214	1536-8年	87231	1568-70年	93681
1503-5年	43844	1539-41年	102660	1571-3年	73204
1506-8年	50373	1542-4年	99362	1574-6年	100024
1509-11年	58447	1545-7年	118642	1577-9年	97728
1512-14年	60644	1550年	132767	1580-2年	98002
1515-17年	60524	1551年	112710	1583-5年	101214
1518-20年	66159	1552年	84968	1586-8年	95087
1521-3年	53660			1589-91年	98806
1524-6年	72910	1559-61年	93812	1592-4年	101678
1527-9年	75431	1562-4年	61188		
1530-2年	66049	1565-7年	95128	1598-1600年	103032
1533-5年	83043				

[出典] F.J. Fisher, *London and the English Economy 1500-1700*, London and Ronceverte, 1990, p.82.

フィッシャーによれば、これは16世紀前半にはイングランドで貨幣が悪鑄され、そのためにポンドの価値が低下し、輸出には好都合になったが、後半になると改鑄したためポンドの価値が高くなり、輸出量は伸びなくなった。

そのためイングランドは、西欧の外部に市場を求めた。1551年にはモロッコに、1553年にはギニアに船が送られ、さらに同年、ロシアとの交易を目指し、スカンディナヴィア半島の北側を廻る北東航路での航海がなされた。1570年代になると、レヴァント地方と直接貿易するところみがなされた。このように、新市場をヨーロッパ外に求めようとする動きがあった。さらに、それまでの厚手の毛織物（旧毛織物）ではなく、薄手の毛織物（新毛織物）がつくられるようになり、それまでとは異なる市場が探求されるようになる。それに加え、毛織物輸出不況になったイングランドでは、外国人商人を排除する傾向が強まった。フィッシャーはこれを、「経済的<sup>ナショナリズム</sup>国民主義」と呼んだ。ここに、ロンドンのアントウェルペンからの離脱傾向がみてとれる。しかも、イングランドの取引相手地域は大きく拡大する。

17世紀前半イングランドの毛織物輸出のトレンドをみると、旧毛織物から新毛織物への転換に大きな特徴がある。旧毛織物の輸出の中心はヨーロッパの北部・中部・東部であったが、新織物はヨーロッパ南部に輸出され、輸出量は、イギリス内乱の勃発まで増大することになった。イングランドは、

もはやヨーロッパの北部・中部・東部ではなく、スペインと地中海に新市場を見いだすようになり、新毛織物が売られた。マーチャント・アドヴェンチャラーズの勢力は弱まり、レヴァント会社の重要性が増加する。

イングランドはまた、再輸出を増やした。たとえば、スペインと地中海に、ニューファンドランドの魚、ロシアの獣皮、蠟、毛皮、バルト海地方の穀物、木材、麻を再輸出した。ロンドン商人は新大陸の物産、とりわけ原材料に目を向けた。しかしそのような政策は、イングランドとオランダが対決するきっかけとなった。

フィッシャーによれば、イングランド経済は、ロンドンをフィルターとして、アントウェルペンを通じてヨーロッパ大陸とつながっていた。ロンドンからマーチャント・アドヴェンチャラーズに手によって未完成の毛織物がアントウェルペンのステープルに輸出され、アントウェルペンで加工されていたのだから、産業資本主義の理論に従えば、ロンドンがアントウェルペンに従属していたといえるであろう。ただしその従属度が高くなかったのは、イギリス経済が、フランドルによってモノカルチャー化されていなかったというのが、一つの理由としてあげられよう。

17世紀初頭には、地方から1年間の一時期をロンドンで過ごす地主も多数いるようになった。むしろ、彼らの家族や召使いらもロンドンにきた。そのため、ロンドンは大量の消費を生み出すことになった。ロンドンでは、ジェントルマンらが共に時間を過ごすクラブが発達した。同市は、イギリス最大の消費財の市場となった。ロンドンはイギリス最大の港であり、中心的な商業・金融センターであった。

ロンドンの人口が増大したのは、このような理由のためであり、デマンドプルという視点からみた場合、ロンドンこそ、イギリス経済発展のエンジンとなった。

17世紀になると、イギリスの貿易拡大は、輸入主導型の形態をとった。貿易が増大したのは、外国商品に対する需要が増大したからである。リネン、高価な絹、ワインに加えて、果物、安価な絹・香料・砂糖、さらにタバコ、キャラコがスペイン、地中海、アフリカ、アメリカ東西インドから輸入されたのである。そのためイギリスは、国際収支の問題を真剣に考えるようになった。貿易の中心が輸出から輸入に変わったので、貿易拡大の担い手は、製造業者ではなく貿易商人になった。そのため、地方ではなくロンドンが経済的にますます重要になった。

## 6. ロンドンとアントウェルペン——フィッシャーの長所と短所

以上、フィッシャーの論を簡単に紹介してみた。かつてフィッシャーがトレヴァー＝ローパーにならない、1540年から1640年にかけてのイングランド史を、「トーニーの世紀である」<sup>19)</sup>と呼んだが、そ

19) F. J. Fisher, "Tawney's Century", Corfield and Harte *London and the English Economy 1500-1700*, p.149.

R.H. トーニー著 (浜林正夫訳) 『ジェントリの勃興』 未来社, 1957.

れをそのまま「フィッシャーの世紀」と言い換えることもできるであろう。

トーニーによれば、この時代のイングランドではジェントリが興隆し、新しい農業技術が導入された。前者は『ジェントリの勃興』で、後者は『16世紀の農業問題』<sup>20)</sup>で論じられた。トーニーは、イングランドの国民経済を前提とし、農業史をベースとして研究した。それに対しフィッシャーはヨーロッパ大陸、なかでもアントウェルペンへの未完成の毛織物輸出を重視した。フィッシャーの考え方に従えば、これこそイングランドの後進性の現れであり、イングランドの低開発状況をもっとも適切に示す。しかしイングランドは、この1世紀間に、完成品の毛織物を輸出するようになる。イングランドはもはや低開発国とはいえず、ロンドンがアントウェルペンの衛星都市ではなくなった。しかもフィッシャーは晩年には、大西洋貿易も視野に入れるようになった。フィッシャーの歴史学とは、ロンドンの貿易を通してみたイングランド経済の拡大史だといってよかろう。トーニーからフィッシャーへの転換は、いわば「閉ざされたイングランド」から「開かれたイングランド」へとというパラダイムシフトを意味しよう。とはいえイギリス経済史研究において、この重要性は、日本はむろん、イギリス本国でも現在では忘れられているように感じられる。

しかし、フィッシャーは、あくまでイングランド史家であり、イングランドの低開発も、こんにちの発展途上国のそれと同じだと考えている。ここに、大きな問題点が潜んでいることもいうまでもない。そもそもフィッシャーは、1960年頃ロンドン大学に留学していた角山榮に対して、「ヨーロッパ大陸にも行ったことがない」<sup>21)</sup>と自慢げに言ったほどであるから、その視野がイギリス一國史観であるという限界は否定できない。

とはいえフィッシャーの一國史観は、イングランド経済が、外部世界の変化に対してどのように対応したのかというディマンドブルの思想によって支えられている。17世紀中頃までに発見されたイギリス毛織物の主要な新市場は南欧と小アジアであり、気候的に旧毛織物は適さず、より軽い新毛織物に重点が移ったという発想が、その典型であろう<sup>22)</sup>。

フィッシャーの説に従うなら、アントウェルペンの影響下からの離脱過程こそ、イングランドの経済発展を意味する。ロンドンを通じたイングランド産の毛織物輸出は、アントウェルペン以外の地域に及ぶようになった。イングランドは、低開発の状態から抜け出していったのである。

しかしながら、現在の研究状況からみるなら、フィッシャーの説には次のような問題点があることも指摘せざるをえない<sup>23)</sup>。

まず、ヨーロッパ北部の市場が新毛織物に適さなかったというフィッシャーの主張は、そのまま

20) R. H. Tawney, *The Agrarian Problem in the Sixteenth Century*, New York, 1912.

21) 角山榮『「生活史」の発見——フィールドワークで見る世界』中央公論新社、2001年、191頁。

22) 船山栄一『イギリスにおける経済構成の転換』未来社、1967年、47頁。

23) 本稿で指摘する以外のフィッシャーの問題点については、J. D. Gould, *The Great Debasement: Currency and the Economy in Mid-Tudor England*, Oxford, 1970; Robert Brenner, *Merchants and Revolution: Commercial Change, Political Conflict, and London's Overseas Traders, 1550-1653*, Princeton, 1993.

支持できるものではない。実際、16世紀第1四半期に、オランダの新毛織物は、バルト海地方への輸出量を大きく伸ばしているからである<sup>24)</sup>。フィッシャーには、オランダとの比較史という観点は、あまりないようである。

また、毛織物輸出量の長期変動を通貨操作との関係だけで説明するのは、基本的に不可能である。そのためには、毛織物の品質と需要が長期にわたって一定だったという前提が必要である。そのような前提に立つこと自体、そもそも無理があることはいうまでもない。イングランドの毛織物生産の技術革新が、ヨーロッパ大陸の消費者のニーズに合ったと考えるべきなのである。

さらに、貨幣操作そのものは、まずイタリアで発明され、やがてアントウェルペンを通じて、イングランドに導入されたものと考えられる。しかしフィッシャーには、そういう観点はない。しかもイングランド商人は、アントウェルペンに行って商業活動に従事していたのである<sup>25)</sup>。

ロンドンとアントウェルペンは、毛織物輸出だけによって結びつけられていたわけではない。商人が往来しており、人的ネットワークも強められていた。さらに、金融上の技術も、アントウェルペンからイングランド(ロンドン)へと移転した。ロンドンの巨大化に関しても、イングランドとヨーロッパ大陸を強く結びつける働きをしたという点に目を向けるべきであろう。

イングランドは、ロンドンというフィルターを通じて、アントウェルペン、さらにはヨーロッパ大陸の市場と結びついていた。ロンドンがイングランドのファッションや社交の中心となったのは、アントウェルペンを通じたヨーロッパ大陸の文化がロンドンに流入したからである。フィッシャーの論をもとに、「ロンドン-アントウェルペン枢軸」という言葉ができ、ロンドンからアントウェルペンに輸出される毛織物の重要性が認識されるようになった反面、アントウェルペンからロンドンへの輸入については、あまり研究が進展していない<sup>26)</sup>。

イングランドは、たしかにアントウェルペンの支配下から脱することで経済発展をした。しかしまた、16世紀中葉までのロンドンを中核とするイングランド経済成長は、アントウェルペンなしでは考えられないのも事実である。

ロンドンがアントウェルペンの影響下から抜け出す過程もまた、「アントウェルペン商人のディアスポラ」の一部とみなせよう。たしかにこのような見解に対しては、イングランド在地商人の役割を過小評価しているとの批判ができよう。しかしその一方で、アントウェルペンの商業ノウハウを十分に身に付けたからこそ、ロンドンは自立化が可能だったことを忘れてはなるまい。換言すれば、このディアスポラの完成形態こそが、実はロンドンの自立化であった。とはいえ外生要因と内生要因の厳密な区別は不可能である。ここでは、ロンドンの自立化でさえ、アントウェルペンの役割を考慮せずに論ずることは不可能だと指摘するにとどめよう。

24) 玉木『北方ヨーロッパの商業と経済』126-130頁。

25) Oscar de Smedt, *De Engelse Natie te Antwerpen in de 16e eeuw (1496-1582): uitgegeven met de steun van de Universitaire Stichting van België en onder de au spiciën van het Provinciebestuur van Antwerpen*, 2 Vols, Antwerpen, 1950-54.

26) 例外として、A.M.Millard, "The Import Trade of London, 1600-1640", University of London, Ph. D.Thesis, 1956.

しかもロンドンも、「アントウェルペン商人のディアスポラ」の主要都市であるアムステルダムとの関係を強めていったのである。この二都市の商業関係を考えれば、ロンドンがアムステルダムに従属していたことも疑いの余地がない。すなわち、アントウェルペンから自立しようとしたロンドンであったが、アムステルダムに対しては——アントウェルペンと比較すると程度は低いとはいえ——、従属化傾向を免れることはできなかった。さらに、アムステルダムには、アントウェルペンからの移民が押し寄せていたのである。

## まとめと展望

ブリュッヘからアントウェルペンという北方ヨーロッパの中心市場の転換は、より広大な経済圏の誕生を意味した。イングランドから未完成の毛織物がアントウェルペンに輸出され、南ドイツの鉱産資源が送られ、さらに、新大陸からの銀が流入した。さらに、取引所が建設され、「価格表」が発行された。アントウェルペンは、北方ヨーロッパの経済の中心であり、情報拠点でもあった。

アントウェルペンは、アムステルダムにも大きな影響をおよぼした。アントウェルペン商人はすでに16世紀中葉からアムステルダムに移住を開始しており、彼らの商業ノウハウは、アムステルダムに移植された。

このように考えると、「近代世界システム」は、「アントウェルペン商人のディアスポラ」からはじまったといえよう。アントウェルペン商人が、ロンドンとアムステルダムに移住し、この三都市の関係が強まっていくことが、16—17世紀前半の北方ヨーロッパ経済では非常に重要な出来事であった。ロンドン、アントウェルペン、アムステルダム間の商人の移動は大変活発になり、一つの経済圏が生まれたのである。

「近代世界システム」が16世紀中葉のヨーロッパに誕生した時点での、この三都市のネットワークの重要性は軽視されるべきではない。同質性の高い商業空間が、北西ヨーロッパの一角に生まれたからである。

ウォーラーステインの議論では、国家を越えた商人ネットワークという視点は感じられない。しかし、商人は、中世だけではなく近世においても、やすやすと国境を越えて活動していたのである。

国家と国家が競争するにせよ、そもそも国境を越えてさまざまな資源を入手しなければならなかったのだから、コスモポリタンな商人は、国家の維持のためにも必要だったはずである。国家の歴史がいわば歴史の縦糸だとすれば、商人の歴史は、歴史の横糸ということになる。この二つの織りなす歴史こそ、「近代世界システム」だったとはいえないだろうか。少なくとも、私の考える「近代世界システム」はそういうものを意味する。

北西ヨーロッパで生まれた商人ネットワークには、南ドイツの市場と強い結びつきがあり、それに比べれば重要性は劣るが、アルプスを越え、イタリア市場とも関係もあった。アムステルダムとバルト海地方との経済関係は強く、アントウェルペンはイベリア半島を通じて、南米の市場とも

つながっていた。

16世紀初頭から中葉にかけてはアントウェルペンが、それ以降少なくとも17世紀末まではアムステルダムを中心とし、北西ヨーロッパの三都市の商業関係は強化され、ますます多くの地域との経済的結合を強めていく。それこそ、ヨーロッパ世界経済が拡大する過程であった。

ヨーロッパ世界経済が誕生したときには、この三都市のなかで、アムステルダムの力が圧倒的に強くなった。その頃に、主権国家体制が成立した。そしてロンドンがアムステルダムに取って代わったとき<sup>27)</sup>、ヨーロッパ世界経済ではなく、世界の多くの地域を覆い尽くす「世界経済」が誕生したということができよう。そのときには、世界は帝国主義時代に突入していたのである。

## ‘The Modern World System’ and the Network of Merchants: Some Features of Early Modern Europe

Toshiaki TAMAKI

### ABSTRACT

In early modern Europe, sovereign states were born. By using ‘The Modern World System’ which was advocated by Immanuel Wallerstein, we can explain the reason as the following. After the death of ‘The World Empire’, Europe did not need to bear the burden of maintaining bureaucratic systems, and the surplus were used for the economic development. ‘The Modern World System’ produced the birth of sovereign and later national states.

However, his theory is based on ‘national history’, and thus he has missed the existence of merchant networks, which made possible the movements of the money and resources all sates needed for waging wars.

In this paper, I consider ‘The Modern World System’ as a system of merchant networks. The network began when the ‘diaspora of Antwerp merchants’ occurred, and when Antwerp merchants migrated to Amsterdam and London. Homogeneous merchant networks mere formed in North-Western Europe, and they were basis for ‘The Modern World System’.

---

27) 18世紀になると、ハンブルクが台頭する。これについては、玉木『北方ヨーロッパの商業と経済』第7章をみよ。

